

私はこの夏、二年半ぶりに祖父母の家に帰省した。毎年、祖父母の家に帰省することが我が家の恒例行事だった。が、コロナ禍で小学四年生以来帰っていなかった。久しぶりの祖父母の家は、以前と全く変わることなく、緑がきれいで空気が澄んでいた。私は、家の裏まで歩いていき、田んぼや畑、きれいな緑の山々、気持ちよさそうに泳ぐ魚を眺めた。この二年半、この風景を何度も思いめぐらせていた。なぜなら、我が家には「定期便」が届くからだ。



倉敷市立岡田小学校 4年 児玉 幸太朗 (令和4年度)

「なかよし」(水彩画)

ぼくは友達と遊ぶのが好きなので、いろいろな友達となかよくしたいと思います。なかよく遊ぶと楽しくて、にこにこ笑顔になります。

それは、祖父母からのダンボールいっぱいのお米と野菜だ。ダンボールを開くと、新聞紙に包まれた野菜たちがぎっしりつまっている。その新聞紙を広げると、季節の野菜がひよっこりと顔をだす。祖父母が作る野菜は、今まで見たこともないほど大きなにんじんや色とりどりのミニトマト、つややかな緑の大小様々な大きさのピーマン、どの野菜も個性いっぱいだ。ここで育つ野菜とお米は自然の恵みに満ちあふれている。その野菜たちを眺めながら、いつもこの場所と祖父母の笑顔を思い出していた。

と思っていた。畑を歩き、キュウリやトマト、いんげん、オクラ、色々な野菜を一つ一つ観察した。



私は野菜が育つ過程でどんな状態から花が咲き、実がなって成長していくのか、実際にはあまり見たことがない。唯一、小学三年生の時にトマトの栽培をした時、毎日欠かさず水やりをし、やっと小さなトマトが収穫できたくらい記憶しかない。祖父母にとって、畑や田んぼの手入れをすることは、ごく当たり前の事なのかもしれない。でも、私にとっては、小さなトマトを収穫することさえも大変な事だった。

畑をぐるっと見渡して、私は祖母に尋ねた。「ばあちゃん、ここ何で柵しとん？」「いのしが山から下りてきて、野菜を食べるんよ。農薬使つとらんから、虫もくるし、色々手入れが大変なんよ。」いつも「定期便」の中に詰められている野菜やお米は、祖父母の日々の努力の賜物だ。そのおかげで、私たちが安心してお米や野菜を食べるこ

とができることに、感謝しかない。私はスイカがなっている畑まで歩いて行った。足をみると、見たこともないほど大きなスイカが、ごろごろとなっていた。「ばあちゃん、一個とってもいい？」私は祖母に声をかけた。どれにしようかと迷ったが、中でも一番大きくて食べごろのスイカを畑から家まで持って帰ることにした。しかし、想像以上の重さで、腕が痛く、途中で何度かくじけそうになった。そして、その思いで台所まで持っていく、早速祖母にスイカを切ってもらって、縁側で食べた。採れたてのスイカは本当においしくて、格別だった。スイカを食べて、しばらくずっと景色を見ながらぼーっとしていた。この場所にいると、なぜか心が落ち着く。いつも時間に追われている気がするが、ここに来た時だけは、なぜか時間がゆっくりと流れ、空を見上げて、辺りの景色を見わたす心の余裕ができる。

コロナ禍で今まで当たり前だと思っていたことが、当たり前でなくなった。祖父母が元気で野菜やお米を作ってくれる当たり前がずっと続いてほしい。私は生まれてから、家で炊いて食べるお米は、祖父母が作ってくれたお米だ

けだ。そして我が家に届く「定期便」は祖父母からの元気の便りだ。いつも祖母が言う決まり文句は、「お米と野菜が届くうちは、ばあちゃんたちが元気にしている証拠だから安心して」そんな当たり前が当たり前でなくなる時がくるのではないかと一瞬頭をよぎった。それをかき消すように、祖母が作ってくれたおにぎりを口にほおばる。当たり前は当たり前なんかじゃなくて、多分奇跡だ。この小さな幸せの積み重ねが続くこと自体、奇跡なんだ。祖父母の野菜やお米が食べられる日常のありがたさを胸にきざみながら、口に入れたお米をかみしめた。ふんわりとやさしい甘みが口の中に広がった。その瞬間、思わず笑みがこぼれた。

また来年この場所に来て、大好きな祖父母の笑顔と、今と変わらないきれいな田んぼと畑を見たい。そして、祖母が作った世界一おいしいおにぎりを食べたい。

これからも「元気の証の定期便」が届くことを心から楽しみにしている。

